

# 田中 浩二 論文内容の要旨

## 主 論 文

Burnout of Long Term Care Facility Employees: Relationship with Employees' Expressed Emotion toward Patients

介護老人保健施設職員のバーンアウトー職員の患者への感情表出との関連ー

田中浩二 磯直樹 佐賀里昭 徳永瑛子 岩永竜一郎  
本田純久 中根秀之 太田保之 田中悟郎

(International Journal of Gerontology Volume 9 Number 3, 2015 年 9 月掲載予定)  
15 ページ (本文 13 ページ 表 2 ページ)

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科医療科学専攻  
(主任指導教員：田中悟郎教授)

## 緒 言

認知症を有する高齢者が増加している。高齢者に長期間のケアを行っている職員のバーンアウトに関連する要因が様々報告されているが、認知症を有する高齢者を担当すると疲弊しやすくなることが指摘されている。これは、認知症の行動・心理症状 (BPSD: behavioral and psychological symptoms of dementia) が負担になっているからと考えられる。さらに、認知症を有する高齢者と職員との関係性が BPSD と関連していることも報告されている。

この患者と職員の関係性を評価する優れた指標として感情表出 (EE: expressed emotion) があるが、介護老人保健施設 (老健) 職員の EE とその関連要因を検討した報告は見られない。

そこで、本研究は、老健職員のバーンアウトに関する要因を職員の EE を含めて明確にすることを目的に行った。

## 対象と方法

対象は、老健に勤務する看護及び介護職員である。老健 30 施設に計 1470 部調査票を送付し、411 名より回答を得た (回収率 28. 0%)。調査時期は 2008 年 10 月より 12 月までであった。

調査項目は、バーンアウトの評価尺度である Maslach Burnout Inventory (MBI)、

EE の評価尺度である Nurse Attitude Scale (NAS)、対象者の基本的属性などであった。2 群間の比較は Mann-Whitney 検定、3 群間以上の比較は Kruskal-Wallis 検定を用いた。各要因の MBI に対する独立した影響の大きさを検討するために、MBI 下位尺度（消耗感、脱人格化、達成感）の高得点の有無を従属変数とした多重ロジスティック回帰分析を行った。

## 結 果

MBI の下位尺度の高得点者の割合は、消耗感は 197 名 (51.6%)、脱人格化は 122 名 (31.4%)、低達成感 301 名 (83.8%) であった。次に、NAS 合計の平均得点は 44.3 であった。NAS 下位尺度の平均得点は、肯定的言辞 21.9、批判 14.9、敵意 11.5 であった。消耗感では、夜勤の有無で有意差が認められた。脱人格化では、性別、年齢、夜勤の有無で有意差が認められた。達成感では、夜勤の有無、臨床経験年数、現職勤務年数で有意差が認められた。

MBI 下位尺度の高得点の有無を従属変数とした多重ロジスティック回帰分析を行った結果、消耗感では NAS の下位尺度の批判、脱人格化では男性、40 歳未満、NAS の下位尺度の敵意が有意な関連要因として認められた。

## 考 察

本研究では MBI 高得点者（高いバーンアウト）の割合が、消耗感 51.6%、脱人格化 31.4%、低達成感 83.8% であった。本研究と同じカットオフ値を用いている先行研究の結果と比較すると、本研究の対象者のバーンアウトの程度は高いことが示唆された。本研究の対象者は約 70% が介護職であり、認知症や BPSD、ならびにストレス対処技術についての教育を十分に受けずに業務に従事している者がいると考えられる。また、介護現場は慢性的なマンパワー不足が常態化している。これらのことが高いバーンアウトの誘因となっていることが推察される。

本研究の多重ロジスティック回帰分析の結果、消耗感では NAS の下位尺度の批判、脱人格化では男性、40 歳未満、NAS の下位尺度の敵意が有意な関連要因として認められた。従って、職員の患者に対する批判や敵意のような否定的な感情表出は、バーンアウトに有意に関連することが示唆された。

介護の労働環境を改善するとともに、高齢者の精神疾患に関する教育及び BPSD への対処技能を身につける行動スキル訓練プログラム、そしてパーソンセンタードケアの修得などの必要性が示唆された。